

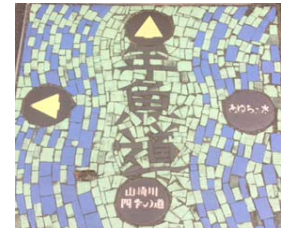
## あゆちの水

4月5日レポートで紹介した、名古屋市瑞穂区「亀吉廣」先代ご主人さんから聞いた「あゆちの水」を訪ねた。地下鉄「瑞穂運動場東」駅で降り、なんとかたどり着いた。じつは山崎川に桜見物に来たときにも探したが見つからなかった。今回、偶然見つけることができた。道路には「あゆち水」と表示されており、すこし拍子抜けしてしまった。瑞穂運動場前の坂の上の森に、ひっそりと。ここは「師長町」である。あの藤原師長公が、このあたりで琵琶を奏でていたという。確かに、小高いところで遠い昔を偲ばせる。



『尾張名所図会』に次のように紹介されている。

あゆち  
年魚道は愛知の名称の由来とされ、何カ所もの伝承の地がある。瑞穂運動場の近くにある年魚道の水もそのうちのひとつだ。



井戸の周囲には、江戸時代につくられたという石の井桁が組まれている。深さ

三メートルほどだ。戦前はどんな日照りが続いても涸れることがなかったという。戦後、荒れ果てたままとなっていたのが、1977年(昭和52年)に整備された。

万葉集で「小治田の年魚道の水をひま間無くぞ人は汲むとふ 時じくぞ人は飲むとふ 汲む人の間無きがごと飲む人の時じきがごと 吾わぎもこ妹子にわが恋らくは止むときもなし」と詠まれた小治田の年魚道の水が、本当にここであったのかどうかは定かではない。

しかし、このあたりを旧・東海道の前身というべき鎌倉街道が通っていた。鎌倉街道は鎌倉へ通じる道という意味で、全国に鎌倉街道と呼ばれた道が何本もあった。そのうちの一本がのちの東海道の元となった。

小治田の水はあくまで伝承であり、この井戸そのものは万葉の時代からあったわけではない。ただ、万葉集が詠まれた時代は、瑞穂運動場のすこし南は海であり、かつては豊富な水が湧き、旅人たちの喉を潤していた。

(2017年5月21日)